

News Letter Vol.23 October, 2008

文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」採択事業
『全人的ながん医療の実践者養成』 について

附属病院腫瘍センター センター長 藤井 博文



このたび文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」に本学と国際医療福祉大学が連携して行う「全人的ながん医療の実践者養成」が採択されました。このプログラムは本学大学院医学研究科を中心として、医師や看護師、薬剤師、放射線技師、がん登録士といったがんのチーム医療における構成員に対して最新の知識と高度な技術を教授し、がん医療の向上に努めることとしております。

現在、我が国のがんの現状を見てみますと、2人に一人ががんにかかり、3人に一人ががんで亡くなる時代になろうとしています。高齢化社会を迎える今後、さらにがん患者が増え、さらに合併症を有する状態が多くなります。がん医療は日々研究・開発が行われており、エビデンスの内容もめまぐるしく変化し、治癒や延命につながってきています。このため、日々進歩するがん医療についていく必要がありますが、腫瘍学に関する卒前・卒後の教育体制が十分とは言えません。

また、がん医療は、患者数の増加、がん医療の質の向上、診療期間の長期化に加えて、家庭や経済、心理的問題も複雑に絡み合っており、これらについても早急に対応する必要があります。

中・長期的な視点からは、大学院での研究とがんの臨床研修を合わせた専門医コースは、学位と日本臨床腫瘍学

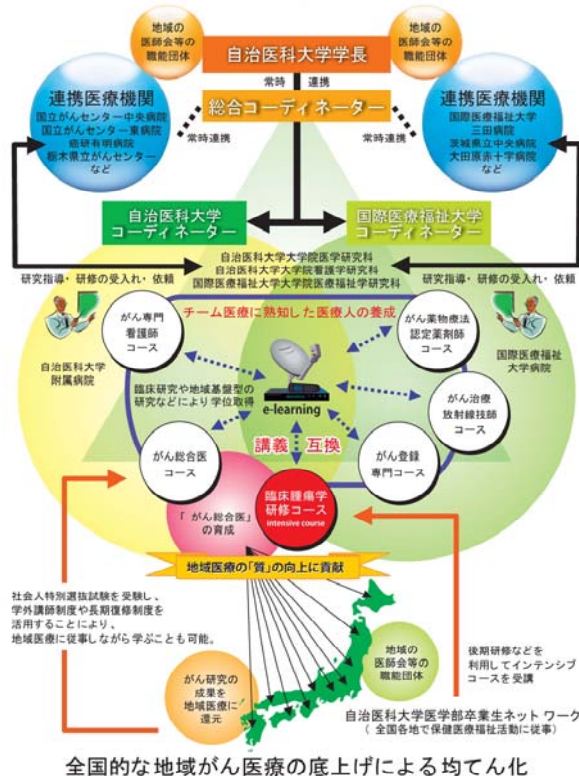
会がん薬物療法専門医の資格取得を通じ、地域さらに発展させて我が国のがん医療を牽引するような人材の育成を目指しています。これには社会人大学院制度の利用も可能です(社会人大学院制度については、地域医療オープン・ラボ又は学事課へお問い合わせください)。

目前のがん診療を解決する、いわゆる短期的な視点からは、現在、各領域で活躍している医師に対してより専門性の高い知識と技術を短期間に研修させるものとしてインテンシブコースを設置しています。1年間のコースになっており、本学附属病院だけでなく連携先の国立がんセンター中央病院、同東病院、栃木県立がんセンターなどで研修することが可能です。インテンシブコースは、義務年限中の卒業教育の一環としての利用も可能であり、特に本学医学部卒業生には「腫瘍が診られる総合医」として、地域のがん医療での活躍を期待しています。本事業の一環として職種に関係なく、共通の講義として設定している臨床腫瘍学講義は、インターネットを活用した遠隔教育システム(e-learning)を採用しております。この講義は学内外のがん医療の各分野の我が国を代表する講師の方々で構成されており、他に類がありません。Liveで講義を聴くことも、研修終了後地域へ戻った後で聴くこともでき、生涯教育のための体制の一つとして位置づけることを目指しています。

全国にがん診療連携拠点病院が整備されてきてい

全人的ながん医療の実践者養成

事業推進代表者: 高久 史彦(自治医科大学学長)
 事業推進責任者: 藤井 博文(自治医科大学附属病院腫瘍センター長)
 事業推進副責任者: 開原 成允(国際医療福祉大学大学院長)



ますが、その活動だけではがん医療の底上げは困難です。地域特有のがんに関する問題があった場合、それを解決するための研究も必要になってきます。これらを成し遂げられるのは、地域に根差した医療を展開している本学のほかありません。卒業後、大学から遠く離れても、教育や研究のやり取りを通じて一体となり、より良いがん医療を、遅滞することなく、遍く提供していくことを夢見ています。皆様のご支援並びにご参加をよろしくお願い申し上げます。

社会人大学院生の現状 — 社会人学生との面談結果 —

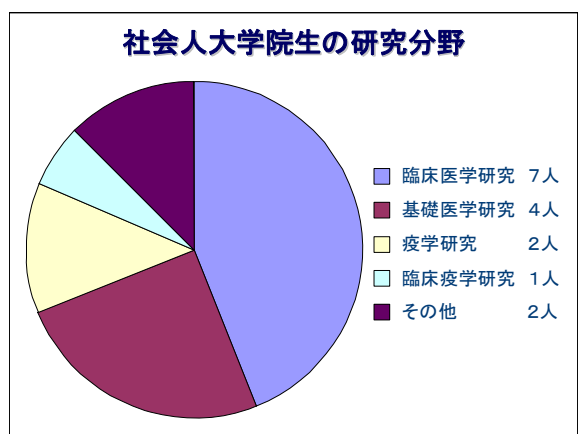


本学大学院医学研究科では、平成18年度より社会人枠での入学が認められるようになりました。これに伴い、社会人学生の学習及び研究がスムーズに進むように、大学院学外講師制度や社会人大学院進捗状況審査会が設けられていますが、地域医療オープン・ラボでは毎年8月から9月にかけて社会人大学院生と個別面談を行っています。その結果を担当指導教員に報告し、問題点の早期発見とその解決に努めています。本年度も休学中の1人を除き全員と面談を行いましたので、社会人学生の現状として報告します。

今年の9月現在で、社会人学生は3学年までで16人、その内自治医大卒業生が11人です。所属は脳神経外科5人、胸部外科2人、小児科2人、整形外科2人、精神科1

人、地域医療1人、緩和ケア1人、さいたま医療センター血液科1人です。勤務地は、栃木県 8人、茨城県3人、東京都2人、静岡県1人、秋田県1人、山形県1人で、全員が病院勤務です。そのうち、1人が長期履修制度を利用している休学中で、2人が産後休暇中でした。通常勤務で仕事が終わる時間が、午後7時頃までが4人、午後7-9時が6人、午後9時以降が3人で、その中には午前0時までが1人いました。当直は月2-4回が11人と多く、月5回を超える人が2人いました。しかし、on call は無い人から月半分まで幅広く分布していました。研究日の有無については、無い人が6人、月1日が1人、週半日が1人、週1日が5人でした。自治医大への来学の頻度については、後期研修中などで、主に大学にいる人が4人、勤務終了後ほぼ毎日来ている人が1人、週1回の人が4人、月1回程度が2人、ほとんど来られない人が2人でした。研究に費やす時間については、自治医大に勤務しているが全く研究に時間が取れないと答えた人、臨床研究で倫理委員会の承認を得ないとできない人、症例やサンプルの集まり具合に左右されるなど事情によりさまざまでしたが、週数時間から20時間ぐらいが大勢を占めていました。

自治医大では社会人学生が大学に来なくてもインターネットを通してコース学習が行えるように、図書館のビデオオンデマンドのコーナーで大学院共通カリキュラム講義や大学院特別講義を配信しています。それらを視聴してレポートを提出すれば単位が取得できます。ビデオオンデマンドの利用状況については、レポート作成の半分以上に利用した人が6人で、利用が1回以上半分未満の人が3人でした。ビデオオンデマンドをよく利用しているが、大学院のレポート作成には利用しなかったと答えた人が2人いました。1年生の4人がまだ利用していませんでしたが、2年生以上では、休学中で面談のできなかった1人を除き、全員が少なくとも1度は利用していました。



研究分野では、患者を対象とした臨床医学研究が最も多く7人でした。その次が基礎医学研究の4人で、すべて自治医大で研究をしていました。2人が疫学研究をしており、臨床疫学研究を手掛けているのは1人でした。その他の2人はコンピュータによる手術のシミュレーションの開発などに携わっていました。

研究の指導は、常にメールで指導を受け研究会などでしばしば指導教員と会うと答えた1人を除き、全員自治医大に来た時に直接指導を受けていました。メールで指導を受けていると答えたのは4人でした。

地域医療オープン・ラボ 岩花 弘之、亀崎 豊実、熊田 真樹

自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
 TEL 0285-58-7477 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>